

マツテオ・リツチと漢字

平川祐弘『マテオ・リツチ伝1』（東洋文庫一四一、平凡社、一九六九年）

コロンブス以前にもヨーロッパからアメリカへ渡ったヴァイキングなどがいたことは知られているが、それにもかかわらず一四九二年にアメリカを発見したコロンブスが偉人と目される所以は、それが前に何も行なわれていなかったと同じ状態でなされた発見であり、コロンブス以後はヨーロッパ人によるアメリカ史が継続的に展開されているからである。

耶蘇会一士による中国二文化の発見についてもほぼそれと同じことがいえるようである。中国とヨーロッパとの交渉は西暦紀元前から行なわれていて、後漢の時代にマルクス・アウレリウス皇帝の名アントニウスは漢語で「安敦」と記録されており、奢侈を好むローマの上流階級の間では中国産の絹は欠くことのできない必需品にまでなっていた。しかしその交易はローマ帝国の衰退とともに衰え、海陸の交通路も絶えてしまったのである。ビザンチン帝国に至る「絹の道」がとざされてから数百年が流れた西洋の中世、十字軍の時代も末の頃に、回教徒に圧迫され、また蒙古人侵入の脅威を感じたヨーロッパは、使いを元の朝廷に派遣している。その訪問は表面は外交

一 イエズス会。十六世紀にイグナティウス・デ・ロヨラが創立したカトリック教会系の男子修道会

二 平川氏は中国の呼称として「シナ」を使用しているが、ここではすべて「中国」に改めた。

的・宗教的使節として、裏面は軍事力調査を目的として行なわれたのだが、ヨーロッパと中国の交渉のこの再開において注目すべきことは、交渉の動機となった力がもはや単なる交易上の願望だけではなかったということであろう。それは西暦十三世紀のことで、創立されて日もまだ浅いフランシスコ会の神父は蒙古に至り、首都カンバリック（汗の総司令部の意、近代の北京）や南中国の泉州に教会堂を建てるまでに至った。彼らは商人たちと異なってヨーロッパ・キリスト教世界の代表としてローマ教皇やキリスト教君主から派遣されたのである。かれらはけっして悪い待遇は受けておらず、元の支配者の中にはキリスト教徒の妻を持った者もまじっていたといわれている。遊牧民であった蒙古民族は、高度に発達した文化の所有者ではなかったから、戦闘を行ない占領はするけれども、その占領地の行政は、能力ある外国人を重用してこれに任せたのである。特殊技能を生かして元の朝廷で活躍した専門家の中には、ヴェネチアの商人マルコ・ポーロもまじっていた。蒙古帝国の勢力がユーラシア大陸の広大な地表に拡がっていた十三世紀にヨーロッパたちは主として陸路を旅しているが、大洋横断の航路が発見された千五百年代には、宣教師たちはコロンブス、ヴァスコ・ダ・ガマ、マジランなどの大航海家の航跡を半世紀たらずの差で追って、南米に、東西のインドに、極東に渡り、布教を推進しはじめた。（種子島にポルトガル船が着いた六年後にはサビエルがはや日本へ上陸しているのである。）当時の大洋航海船舶の発明は二十世紀における飛行機の発明にも匹敵するような技術史上の画期的な事件であったが、耶蘇会士もいち早くこの文明の利器を利用したのである。もともとキリスト教徒が——ポルトガル人は喜望峰をまわってインド洋を渡り、スペイン人は大西・太平洋を渡って——南海から中

国に近づいた十六世紀、中国では元朝が滅びて明朝の支配がはじまってからもう二百年近くが過ぎていた。外国人を重用したかつての支配者蒙古人を駆逐した中華の人々が治める大帝国の領内ではキリスト教徒は消滅してもはや存在してはいなかったのであった。

コロンブスのアメリカ発見がマルコ・ポーロの旅行記中に伝えられた日本への憧憬による航海であったとするならば、耶蘇会士の東洋布教も未だ見ぬジパングやカタイの改宗を目標とした一大旅行の連続であった。とはいってもヨーロッパ人の世界地理知識はまだそれほど開けていなかったから、嘘のような話だが、耶蘇会士たちは中国に来てその地がマルコ・ポーロの伝えるカタイの国——Catai の語の起源は「契丹」であろうとされている——であるとすぐには判らなかつたほどである。

そうした有様であったから、中国にたいするキリスト教の導入についても、いや中国それ自体の知識に関しても、耶蘇会士はほぼ白紙の状態から出発したといつてよい。そしてそれ以後、西洋文化と中国文化の接触と交流は、ときには太くときには細く、継続的に行なわれることとなり、ヨーロッパ側でも中国についての学問知識が次第に蓄積されはじめたのである。西洋における国学の成立は耶蘇会士リッチをもってはじまるとされている。はじめて中国にはいることを得た西洋人、はじめて明の首府にはいることを得た耶蘇会士、その人物や記録には文化の交流や比較に関心を寄せる学徒の興味を唆る多くのものが秘められているようである。(中略)

サビエルは中国へはいる機会をうかがいつつ南海を往復し、ついにその志をとげずに中国大陸の沖合の上川島で一五五二年に死んだ。その同じ年に——と好んで神の摂理の靈妙に感嘆する

カトリック系の史家はいうのだが——サビエルの「熱烈な願望を満たさんために神に選ばれて」遂に明の首府にはいるべき耶蘇会士、マッテオ・リッチは中部イタリアに生まれたのである。

マッテオ・リッチ (Matteo Ricci) の名は東洋史概説書によく見かける。彼はまたその中国名利瑪竇 (Limađou) によつても知られている。利氏は明末中国の士人の間では「中華の風を慕い、

深く我が儒理に契」った「泰西の儒士」として尊敬されていたのであった。このキリスト教世界の精鋭は、古い儒教文化の国いや「国というよりはむしろ世界と呼ぶべきだ」と彼らが舌を捲いた中国に来て、二つの文化の接触をどのように体験したのだろうか。(中略)

言葉の問題にふれなくては文化の交流は立ち入って論じ得ない。言葉を知らなくては文化の比較も伝達も行ない得ない。リッチは一五八二年八月七



マッテオ・リッチ (Matteo Ricci 1552~1610)

日マカオに着いたのだが、翌年二月十三日の通信は彼の中国語学習の有様を伝えてまことに興味ふかいものがある。

「私がマラッカからお書きしたお手紙で御承知のことかと思いますが、私はインドから中国へ派遣されました。この（マカオ）港に八月に着き、それまで海上に一月以上おりました。神さまの思召で大病にかかり航海中はふせたきりでありましたが、神さまの御恵みで陸地にあがると恢復いたしました。ただちに中国語の学習に取りかかりましたが、御説明いたしますとこれはギリシヤ語ともドイツ語とも全然違う別の言語だということでございます。話すことにかけてはまことに暖味な言葉で、一つの言葉で意味が様々に異なる言葉も沢山あり、時にはその間の差が発音だけ、それも四つの異なるトーンでより高く発音するかより低く発音するかの違いだけなのです。」

声調とは今日でも中国語学習の初心者にたいして発せられる注意、一声、二声、三声、四声、という四声の区別のことであろうか。なお文中の「ドイツ語」とは十六世紀の当時のことであるから「あの野蛮な変わった言語」というニュアンスで使われているのだと思う。リッチの中国語の説明は西洋人には今でも理解しにくいであろうが、漢字を知っている日本人には納得がゆく。彼は続ける。

「それだから中国人同士でさえ互いに理解しあうためにいわんとする言葉を字で書いてみせるほどですが、それというのも文字の上ではいちいち区別があるからです。文字はといいますと、これは私のように自分の目で見、体験した人でなければ到底信じられないものです。世の中に言葉

があり、物がある、それと同じ位、数多くの文字があるので結局七万を越え、それがみな非常に異なったややこしいものです。……すべての言葉は一音節から成り、その書き方はむしろ絵を書く仕方に似ています。西洋の画家と同じように筆で書くのです。利点はこの文字を使う国民は、たとえ非常に言語の異なった国民の間でも、みな文字や書物を介して相互に理解できるといこととです。西洋の文字ではこうは行きません。それだから日本とシヤムと中国は、それぞれ別個の大國で、言葉もまたまったたく違っているのですが、相互理解が非常によく行なわれ、同じ文字が各國で使われているようです。（中略）」

中国語を習いはじめた人の知的興奮が伝わってくるような、一種の文化史的考察をも含む漢字論である。漢字を使用する諸國が一つの文化圏を構成することを指摘し、表音文字にたいする表意文字の利点をあげたわけである。先年、フランスの比較文学者エチアンブルは世界語として漢字の採用を提唱し、「欧米諸國でも漢字にそれぞれ欧米語の訓をふれ」と西洋人の意表をついた提案をしたことがあった。

日本人の小学生で外国に長く滞在した者の中には、視覚的な漢字の字面からその意味は記憶しているが、日本語の発音は忘れてしまい、「空」という漢字を見せるとskyと答える児童もあるという。なるほど西洋語でも訓はふれるのである。